まちを創る

現場発 ①

五福校区①

祭り継続で絆強めた20年

11月5日、熊本市東阿弥陀寺町の熊本全日空ホテルニュースカイ。地元・五福校区で最大のまちおこしイベント「風流街浪漫フェスタ」がことし20回目の節目を迎えるのを記念し、前日に祝賀会が催された。

イベントに携わってきた地域住民や市職員ら約130人が出席。会場には20回分のポスターも一堂に掲示され、まるで同窓会のような雰囲気。「苦楽をともにしてきた仲間が、続けてきてよかったという思いを共有できた」。「五福ふれあいまちづくりの会」の中心メンバー、平野俊晴さん(63)＝米屋町＝は振り返る。

同フェスタは、市五福まちづくり交流センター前の細工町通りを歩行者天国にして開かれる。五福小、公民館、まちづくり交流室が一体となった全国的に珍しい「学社融合施設」。同会は1991年11月、その年の4月に開設された同センター主催の「まちづくりふれあい塾」受講生らがつくった。

地域の伝統を継承・啓発しようと、翌92年8月、秘蔵のえんま像を開帳する宗禅寺の「ゑんま祭り」を約35年ぶりに復活させた。「歩行者天国にした通りにお年寄りと児童が手作りの灯籠を飾り、PTAや婦人会も夜店を出した。手作りの祭りが成功し、自信につながった」と平野さん。

第1回のフェスタ開催はその3カ月後。初めの案では、五福など6校区の地域振興祭として市が主催し、企画・運営は業者任せだった。これに対し、五福校区が「地域住民の祭りにしたい」と申し出たため、各校区の代表からなる実行委と市の共催という形をとり、祭りの名称も実行委内で公募した。

同フェスタでは、地元の総社神社に伝わる「すり鉢舞い」を約90年ぶりに復活させた。羽織はかま姿で、頭にすり鉢、腰にすりこ木。神主役の酒豪が商家で振る舞い酒を飲み重ね、商売繁盛と家内安全を祈願する奇習だ。「この素晴らしい祭りを、復活させない手はない」と古い資料を基に再現した。

フェスタは05年度から市の共催が外れ、段階的に減らされてきた市からの助成金もゼロになった。「続けるか、やめるか」。実行委の中心だった五福校区では、何度も話し合いが持たれた。最後は、細工町と周辺の商店が新たに設立した「五福風流街商栄会」が受け皿となり、地域主体の祭りとして存続させることで決着。五福小児童から、継続を望む声が上がったのも大きかった。

20回目を迎えたことし。あいにくの雨だったが、「すり鉢舞い」に曲と振りを付けた名物の総踊りには、同小児童や地域住民ら約300人が参加。節目の祭りを大いに盛り上げた。

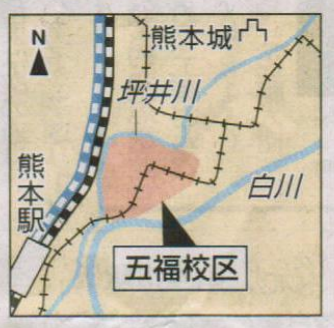
まちづくりへの情熱が、消え去った地域の伝統行事にもう一度光を当てる―。平野さんとともに発足時から同会を支える高畠啓通さん(60)＝川端町＝は込み上げる思いを口にする。「新しく移り住んだマンション住人や子どもが増える中、先人が守ってきた伝統行事を通じて、新旧住民や地域の絆を強めたかった。20年間続いていることそのものが意義深い」

（川﨑浩平）

2011・12・19

風流街浪漫フェスタの20周年を記念した祝賀会で、記念撮影に収まる五福ふれあいまちづくりの会のメンバーら ＝11月、熊本市

20回目の風流街浪漫フェスタを盛り上げた「すり鉢舞い」の総踊り ＝11月、熊本市細工町



政令市の自画像 第4部「地域活動」

まちを創る

現場発 ②

五福校区②

清正時代から不変の町名

校区に設置されている住民手作りの町名表示板を指さす平野俊晴さん＝熊本市米屋町

魚屋町、細工町、川端町、紺屋阿弥陀寺町…。熊本城下の町人町だった五福校区には、職業や立地に由来する当時の町名が残る。「昔から商売人の町。子どもたちは大半が商業学校（現・熊本商高）に進んでいた」。五福ふれあいまちづくりの会メンバーで、最高齢の木之田久七さん(90)＝呉服町＝は記憶を手繰り寄せる。

新町、古町（五福、慶徳校区）地区は、加藤清正が熊本城築城と同時につくった城下町。古町地区は碁盤目状に町割りされ、災害や戦乱に備えた「一町一寺」のまちづくりがなされた。西南戦争で地区の大半が焼失。その跡に町屋が建てられ、大正時代には中央の都市銀行も次々と集まった。

「地域にとって転換期は明治時代。旧士族に代わって財力のある商人が力を持ち、教育にも目が向くようになった」。地元の歴史に詳しい同会の平野俊晴さん(63)＝米屋町＝が解説する。1875年創立の五福小は、有力商人ら地域住民が資金を出し合って建設された。昔から教育への関心が高い地域とされる理由の一つだ。

「熊本の繁華街と言えば、五福校区の『唐人町かいわい』と言われるほどにぎわった時代もあった」と木之田さん。「大正時代に開通した市電は当初、細工町や唐人町を通す計画だった。ところが、問屋が多かった唐人町から『（荷物の積み降ろしなど）商売に影響が出る』と反対の声が上がり、実現しなかった」

熊本の商業のかつての中心地は今、マンションが乱立。祖父の代から米屋町で印刷業を営む勇嘉浩さん(51)は「昔は商売が忙しいとき、子どもの食事を世話するなど近所で助け合った。町内旅行もあったが、今は住民の顔が見えない」と寂しさを口にする。

「地域の歴史を生かしたまちづくりを支える人材を育成しよう」。同会は設立20周年を記念し、昨年4月から約1年7カ月間のロングランで勉強会を開いた。教材は、五福小創立100周年を記念して刊行された「五福百年」。昔を知る古老などから聞き取りをし、校区の沿革史から世相風俗までが1冊に集約された地域の〝バイブル〟だ。

郷土研究に熱心だった勇さんの父、嘉雄さん(故人)も編集委員の一人だった。

「父が愛着を感じていた地域を自分も守っていきたい」。亡き父親の思いを受け継ごうと、勇さんも同会に加入。勉強会にも顔を出した。

変貌するまちと、変わらぬ〝遺産〟。400年以上前から続く町名も、市が65年に変更を求めたが、地元は認めなかった。「あなたたちは清正公さんより偉いのか」。市職員を説き伏せた武勇伝が、今も語り継がれる。

「町名」を守ったあのときから約半世紀―。来年4月の政令指定都市移行後、五福校区は中央区に編入される。ほかと同じように区名を記載した新たな町名表示板が設置されるが、地元の強い要望を受け、住民が自費で作った町名板もそのまま残ることになった。

「先人が残したものを守りたい」。その思いは時代を超えて脈々と受け継がれている。（川﨑浩平）

古い町屋を改装した店舗と、マンションやビルが混在する五福校区の街並み＝熊本市中唐人町

2011・12・20

政令市の自画像　第4部「地域活動」

熊本都市圏

まちを創る

現場発 ③

五福校区③

古民家に再び命吹き込む

利活用プロジェクトが進む「小沢屋敷」。写真はこの家で育った舛田誠二さん（左）と上野ミチ子さん＝熊本市小沢町

12月5日早朝。熊本市細工町の五福まちづくり交流センターに、福岡の観光ツアー客がバスで到着した。

「夕べ、熊本城の本丸御殿で皆さんに踊りを披露したのは、うちの娘なんです」。地元・古町地区（五福、慶徳校区）の案内役を務めた上村元三さん(53)＝魚屋町＝の話に、参加者から「かわいかったよ」と笑顔が返った。

熊本城下の商人町だった古町地区。西南戦争で焼失後に復興した町屋が新町地区を含め今も約400軒残り、近年は観光資源としても注目されている。

一行は熊本商工会議所主催の「肥後六華モニターツアー」。前日夜に熊本城を楽しみ、この日は趣ある町屋を改装した店舗などを見学。歴史をたたえた街並みに、感嘆の声が上がった。

生まれ育った町屋で予約制居酒屋を営む上村さん。五福ふれあいまちづくりの会の活動の傍ら、新町・古町の住民による「城下町和samonもてなし隊」として観光客の街案内も引き受ける。

「町屋や寺院が数多く残り、人情味のある人々が暮らしている。その日常を案内するのが私の役割。訪れた人が『自分も住んでみたい』と思ってくれたらうれしい」。和服姿にこだわるのも、「自分自身が町の風情になりたい」との思いからだ。

地域の〝宝〟である古い建物や街並み。西南戦争の戦火を免れた小沢（こざわ）町でこの夏、空き家になっていた古民家を利活用するプロジェクトが持ち上がった。同町の古い町屋に東京から若い夫婦が移り住んできたのがきっかけだった。

その古民家は、地元で「小沢屋敷」と呼ばれる。日本庭園を備えた約180坪の敷地には白壁の蔵2棟と茶室、母屋がある。蔵は同町で明治期に製造が盛んだったタバコを保管していたもので、回廊を持つ母屋は戦前の旧旅館を移築した。

プロジェクトの中心メンバー、平野俊晴さん(63)＝米屋町＝の案では、まちづくりの会が主体となる「熊本城下町町屋研究会（仮称）」が所有者から屋敷を借り受け、母屋と蔵1棟を貸し出す。もう1棟の蔵はまちづくりのギャラリー、茶室はお茶会のイベント用に活用するという。

8月末には会の若手メンバーらが、荒れた庭の大木伐採や雑草取りに汗を流した。その中の一人、早川祐三さん(33)＝万町＝は「古い建物の所有者たちが『うちも大事にしないといけない』と、価値に気付くきっかけが必要。そのための種をまき続けたい」と力を込める。

この屋敷で6人きょうだいの長男として育った舛田誠二さん(71)＝南阿蘇村＝と、長女の上野ミチ子さん(68)＝呉服町＝は11月、思い出の家を久しぶりに訪れ、地元への感謝を口にした。

「亡き母も『愛着があるから取り壊さないで』と言っていた家。住んでくれる人がいて、まちの発展にも役立てるならば、母も喜んでくれるはず」

あるじ不在のまま朽ち果てようとしていた古民家に、再び命が吹き込まれる。

（川崎浩平）

こだわりの和服姿で町屋を改装した商店などを案内する上村元三さん＝熊本市中唐人町

2011・12・21

熊本都市圏

まちを創る

現場発 ④

五福校区④

風起こす新住民の思い

12月中旬、熊本市中唐人町の坪井川沿いにある集合住宅「風流街浪漫館」。元は船着き場だったという地下の共用スペースでバーベキューが始まった。五福ふれあいまちづくりの会の忘年会。寒空の下、集まった約20人が炭火で香ばしく焼けた肉や魚介、温かいみそ汁に舌鼓を打ち、笑顔をほころばせた。

同会の現メンバーは20～90代まで30人を超え、20年前の発足時から3倍強に増えた。五福校区に新たに移り住んだ人や、仕事場がある人など〝新顔〟の加入も目立つ。

ホームページ製作会社の平野正剛さん(38)＝同市城山上代町＝もその一人。2009年4月に独立し、呉服町に今の会社を立ち上げた。

「最初は住んでいないという遠慮はあったが、『そんなの関係ない』とすんなり受け入れてくれた。強制ではなく、自分たちがまちづくりを楽しんでいるのが伝わった」

毎年11月の「風流街浪漫フェスタ」の運営を手伝い、郷土史研究の勉強会にも欠かさず参加。気さくに接してくれる人たちや、歴史の奥深さにひかれていった。

その半面、「情報発信力が乏しいのがもったいない」とも感じている。イベント情報をブログなどで発信しているのも、「まちづくりに関心がないマンション住人に、自分のまちを主体的に考えてほしい」からだ。

前会長の川上靖さん(48)は92年、長女誕生を機に転勤の多かった会社員勤めを辞め、万町で酒屋を開業。父親も転勤族で、自分も転校を繰り返した経験から、「子どもたちの古里づくりがまちづくりの原点」との思いは強い。「地域の一員として必要とされていることを、子どもたちにも教えたい。私も必要とされ、居場所ができたことに感謝している」

4月から会長を務める団体職員の田中恭徳さん(55)＝呉服町＝も96年、飽田地区から移住した。周囲に知り合いがいなかったが、「今では地域にどっぷり入り込んでいる」と笑顔で語る。

引っ越し直後、今も鮮明に記憶している出来事がある。長男が通うことになった五福小の通学路に、毎朝立っている交通指導員がいた。登校初日、「おい、田中君。今日から学校か」。すぐに名前を覚えてくれたと長男から聞かされ、温かい気持ちになった。

坪井川に面した場所で忘年会を楽しんだ五福ふれあいまちづくりの会のメンバーたち＝熊本市中唐人町

古くからの住民と、若年層のマンション住人が混在する町―。同会は新旧住民の心が触れ合う場をつくろうと、2000年から校区の全住民を対象にした花見「縁遊会」を続けている。五福小児童と廃品回収や白川清掃に取り組み、昨年は廃品回収の益金で、児童が地域の商店を調べ上げたガイドブックを作った。

熊本駅と熊本城を結ぶ新町、古町地区（五福、慶徳校区）。来年4月に政令指定都市になる熊本市は、両地区の歴史ある街並みを、観光資源としても活用したい考えだ。

田中さんは言う。「行政が観光客を呼び込むのもいいが、地元住民が地域に目を向けることの方が大切。一人一人がまちの良さに気付くことで、にぎわいもおのずと生まれるはずだ」

進化を続ける五福校区。新住民の熱い思いが新しい風を起こしている。

（川﨑浩平）

2011・12・22

政令市の自画像 第4部「地域活動」

まちを創る

現場発 ⑤

まちづくり委員会㊤ 城西校区

足元見つめ 地域の宝に光

夜のとばりが下りた12月最初の土曜日。熊本市島崎の城西小学校で、子どもたちが太鼓の練習に汗を流していた。一糸乱れぬバチさばき。気迫のこもった太鼓の音が、体育館の空気を震わせる。

和太鼓グループ「千原太鼓」は2004年結成。現メンバーは小学2年から中学3年までの18人。地元の城西校区はもちろん、県内外のイベントに出演し、その名も次第に知られるようになった。10月に熊本城であったギネス挑戦の「三千人太鼓」に参加した。

通常の練習は週2時間。「けいこは厳しいけど、本番でうまく打てたときの気分は最高です」。太鼓を習い始めて5年目。メンバーを代表し、キャプテンの大井手椋君(13)が魅力を語る。

この日、レギュラーメンバーの横では、タイヤをたたいてリズムを刻む小さな子たちの姿もあった。グループを率いる地元の陣内巧さん(52)は「太鼓への情熱は、先輩から後輩へと着実に受け継がれていっている。いつか校区の伝統文化に育て上げたい」。子どもたちの成長ぶりを頼もしく眺める。

千原太鼓の生みの親は「城西校区まちづくり委員会」。住民主体の地域活動を推進しようと、熊本市は1996年度に活動費の一部を助成する「まちづくり活動支援事業」をスタート。08年度の事業終了まで、全80校区(旧熊本市)のうち、62校区に委員会が誕生した。

「環境美化や伝統行事の継承など、個性あるまちづくりが展開された」と市地域づくり推進課。行政の支援が切れた後も活動を継続させている委員会は3分の2に上り、まちづくりの総合調整役を担う校区の自治協議会にも名を連ねる。

03年に発足した城西校区まちづくり委員会も、町費の一部を活動費に当てるなどして歴史を重ねる。西俊行会長(80)が「活動の原点」と強調するのが、準備段階の研究会時代に実施した住民アンケートだ。

「10年後の城西校区はどのようなまちになってほしいか」との質問に対し、最も多かった回答が「自然を生かした美しいまちづくり」。校区のどこが好きかも「自然、緑、水、空気、景観」が7割を超えた。

城西校区は市中心部から徒歩約30分。都心部にありながら、長命水、延命水、四方池の池などの湧水も多い。恵まれた自然。アンケート結果から古里の水に着目するまで、そう時間はかからなかった。

地元自治会などと「ホタルの湧水群探検ツアー」を企画したのは04年。子どもから大人まで2日間で約350人が名水を訪ね、土砂に埋まった「少年の家跡地」の湧水池で清掃作業も行った。足元を見つめ、まちの魅力を再発見する。「私たちの活動も、あれで弾みがついたような気がします」と西さん。

ほかにも、地元住民グループと「水と緑と蛍の音楽会」を毎年開催。石神山公園内の調整池で夏に開くカヌー体験は、ことしで4回目を迎えた。

校区散策マップを作ったことが契機となって、05年から観光ガイドも始めた。豊富な水遺産をはじめ、岳林寺、三賢堂、釣耕園、叢桂園など点在する名所史跡を紹介。年間1500人を案内し、小中学校の郷土史学習のガイドも引き受ける。

「外から人を呼び込むことも、地域の活性化には重要。先人が残してくれた〝宝〟に光を当て、これからもまちづくりに生かしていきたい」。決意の向こうに、西さんは校区の未来を見据える。（本田清悟）

2011・12・23

体育館で練習に励む「千原太鼓」のメンバーたち ＝熊本市島崎の城西小

地元の児童たちに叢桂園を案内する城西校区まちづくり委員会のメンバー ＝10月、熊本市島崎（同会提供）

熊本都市圏

まちを創る

現場発 ⑥

まちづくり委員会(下)

田迎校区

子ども引き込み環境美化

熊本市の田迎校区を流れる「二の井手」は、加藤清正が造った井手の一つだ。11月中旬、この歴史ある農業用水路で、田迎小の児童約170人がEM（有用微生物群）を使った水質浄化に取り組んだ。

4地点に分かれ、水路前に整列した子どもたちは、2週間前、自分たちで作った野球ボール大のボカシ団子を、川面に向かって次々と投入。ペットボトルに入った茶褐色のEM活性液を注いだ。

その昔、野菜を洗う姿も見られたという井手も、生活排水などで水質が悪化。清流を取り戻そうと、地元住民らでつくる「田迎校区まちづくり委員会」が2002年から年2回、子どもたちに参加してもらって浄化活動を続けている。

「ごみを捨てないようにしたい」「井手を大切に守っていこうと思った」―。水中に沈んだボカシ団子を眺めながら、目を輝かせる子どもたち。同委員会の前田昇一会長(73)は「関心を持ってもらうことが、環境美化の第一歩」と話す。この日、委員会のメンバー約60人も井手に浸かるなどして清掃活動に汗を流した。

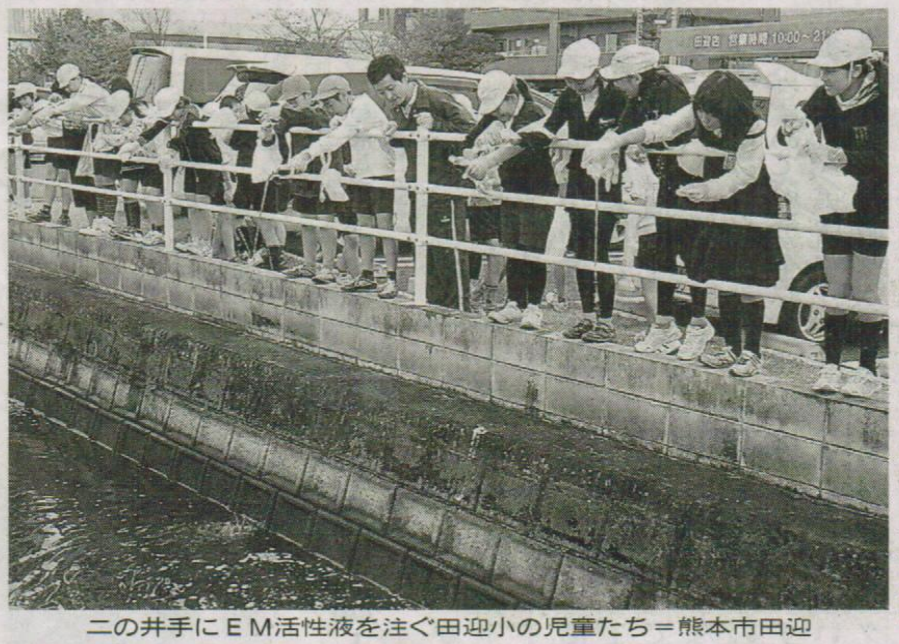
同委員会は、熊本市が校区単位に結成を働きかけた「まちづくり委員会」の一つ。誕生は早く、制度がスタートした翌年の1997年。伝統文化の復活、リサイクル運動、観光ガイド…各校区でさまざまな活動が展開される中で、田迎校区が中心に据えたのが「環境美化」だった。

特徴は学校と協力し、子どもを引き込んだこと。井手の浄化には毎年、同小の5年生が参加する。

これには学校側の期待も大きい。「まちづくりに参加し、地域と関係を深めることで、古里を思う心を育てたい」と秋丸稔校長(59)。成長とともに、子どもたちは地元を離れる機会も増える。「この先、どこに住もうともそのまちを大切にしてほしい。そのことが、まちづくりに頑張ってもらっている校区の人たちへの恩返しになると思うんです」

04年、前田さんが会長になって始めたのが花の輪運動だ。田迎校区は花の栽培が盛んな地域。「花のまち」のPRを兼ね、井手に沿って走る県道(通称・旧浜線)の沿線に、季節の花のプランターを設置。その数は約260個を数え、住民やドライバーの目を楽しませている。

植え替えは年3回行い、委員会の役員が総出で行う。ことしは7月にマツバボタン、10月は女子サッカーの活躍もあってナデシコ、12月にはパンジーを植えた。



二の井手にEM活性液を注ぐ田迎小の児童たち＝熊本市田迎

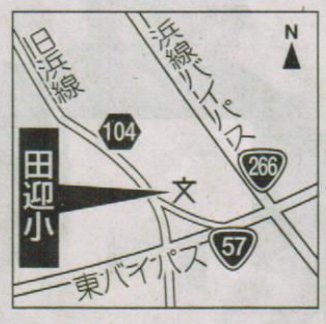
田迎校区のまちづくりは今、大きな変化に直面している。田迎小は児童が約千人を数える大規模校。13年4月には学校が分離し、校区も二つに分かれるからだ。「合同でやるか、別々にやるか。方法はいろいろあるだろうが、時間をかけて積み上げてきたまちづくりを、終わらせてはならない」。前田さんは、自身にそう言い聞かせる。

政令指定都市への移行に伴い、熊本市は来年4月、五つの行政区に分かれる。田迎校区は南区。「同じ区で、他のまちづくりと刺激し合えたら…」。そうした姿を子どもたちにも見せたい。前田さんはこの言葉をかみしめる。

「まちづくりは、ひとづくり」

（本田清悟）

＝第4部終わり



2011・12・24

政令市の自画像　第4部「地域活動」